

**現代G P 取組事業“游” 成果報告会&プログラム**  
**第二部 現代G P “游” 成果報告**  
**学び手と教え手、人とシステムが拓く中国語教育の新たな試み**  
**—— e-Learning 活用、基礎力活用型中国語教育プラン “游”**

**【概要】**

**I 現代G P 取組事業としての“游”**

**II e-Learning 活用、基礎力活用型中国語教育プラン “游”**  
**湯山トミ子 (成蹊大学)**

本セッションでは、平成 18 年度文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代G P）部門6「ニーズに基づく人材育成を目指した e-Learning Program の開発」に採択された本学取組事業「進化する教養教育と国際化新人材の育成——基礎力活用による中国語コミュニケーション能力育成展開プラン “游”」の事業成果について、取組実施本部湯山と武田が報告する。始めに現代G P 事業としての概要（I）、次に教育プランとしての取組内容について湯山が報告する。開発の経緯、経過などについては、刊行予定の『成蹊大学現代G P 成果報告書』（仮題）に記すためここでは述べない。II では、本事業で開発した“游”のもつシステムの特徴——エンドユーザ能動型システム、教育プランとしての特徴などを概説する。また、非専門分野において、短期間に、確実、質の高い音声教育を行い、語彙力を増強し、平易な表現で、コミュニケーションできる中国語人材育成を目指す教育プランとしての“游”の特徴、ならびに教育プラン“游”が実現を目指す初級外国語教育改善の意義と特徴、声調学習を基盤として展開される独自の基礎力活用型中国語教育法について述べる。これにより、学び手と教え手、人とシステムが拓く、I T 時代の中国語教育の姿を展望する一歩としたい。

**III 第4部学習プログラム 演習問題について**  
**武田 紀子 (成蹊大学)**

第4部学習プログラムの中心をなす演習問題は、授業での学習内容の定着、自己の学習レベルの把握、更なるレベルアップのための力試し等の目的のために作成されている。

演習問題としては、学習者が飽きずに、自分のレベルに合った、あるいは、レベルアップのための多種多様な問題に取り組めるように、豊富で多彩な問題が用意されている。これを実現するためのシステムの特徴

- ・ 語彙の辞書データ等の基本データと構文規則等のルールからの問題データの自動生成
- ・ 各種問題用データの構造と、それらのデータのアップロードによるデータの修正、追加、削除の更新機能

について述べる。

次に、学習をフォローする自動採点機能と学習履歴機能について述べる。自動採点機能では、正誤判定に加え、問題のポイント、解説が表示され、学習の深化に役立つように作成されている。また、履歴項目は、学習者の習熟度、弱点等把握が的確になされるよう細かく設定され、学習者本人のみならず、教える側へも情報を提供することができ、今後の学習、教授法に役立てることができる。

### 第三部 中国語発信、現代世界との語らい——“人・文化・社会”

#### 【報告 概要】

#### 1. ICTを活用した教育と課題

##### ICTを活用した大学教育——世界の動向と日本の課題 苑 復傑（放送大学）

21世紀の社会は、知識経済基盤社会、情報化社会、グローバル化社会と称されている。人々の衣食住行、仕事と学び、遊び、文化伝達と交流においては、時代の特徴を象徴したように、インターネット技術の活用、国際感覚の養成と語学の習得などが重要な位置づけとなった。その中で、ICT技術を駆使できる人材、グローバルな視野をもったコミュニケーションのできる人材の養成が大学に期待されるようになった。こうした期待を受け、各国政府、大学、企業及び個人が様々な取組みを行っている。

ここでは まず、大学発のコンテンツ開発と公開・利用にフォーカスし、日米中3カ国の大学教育における ICT活用教育の動向と語学教育の取組みを概観する。次にMITの事例、エール大学の実践を紹介し、自ら世界にコースをオープンしたMITのオープンコースウェア(OCW)とその中に見られる語学教育の動向、さらに中国版のOCWとICTを活用した語学教育の実践例、及び日本の大学の語学教育の実践例と“游”の実践を考察しながら、大学教育(語学教育)におけるICT利用の課題を考えてみる。

#### 2. 言語コミュニケーションと文化理解

##### 報環境との協調的コミュニケーション能力の開発 砂岡和子（早稲田大学）

国際交流の拡大と情報通信技術の高度化に伴い、地域や国境を超えて人・物・情報の流通が拡大している。中でも老大国中国の底知れぬパワーは世界を引きつけて止まず、アジアの隣人である日中両国も、様々な課題を抱えているとはいえ、政治・経済・社会・文化の諸方面で、着実に交流の厚みを増しつつある。通信インフラやICT利用環境の整備につれ、日中異文化間空間でも身近で自然なコミュニケーションが爆発的に増えている。

本発表では、外国語教育とその研究・開発に携わる立場から、最初に以下の3点について問題提起を行いたい。英語習得優先の圧力のもと、極めて限られた学習時間で実施する、第二外国語教育や企業の海外派遣研修において、避けて通れない論点と考えるためである。

- ① 多言語学習は必要か？
- ② 新通信環境下で求められるコミュニケーションスキルとはなにか？
- ③ どのような異文化教育が効果的か？

これらの問題に対し、発表者はアジア5大学遠隔ビデオ会議の実践分析を踏まえ、新時代の情報環境と共生しつつ、仲間同士が協調してコミュニケーション能力を発揮する方法を提案する。

\*ICT: Information and Communication Technology の略語

#### 3. 世界のなかの中国語と日本

##### 日本の中国語教育はどこに向かうのか 古川裕（大阪大学）

文部科学省が今世紀初めに『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想を公表して以来、小学校英語の導入から大学における英語教育の必要性まで、英語教育をめぐる議

論は様々に喧しい。その一方で、英語以外の「その他の外国語」をめぐる議論は、話題の中心からどんどん外れ、大学でのいわゆる第 2 外国語の教育もますます先細りの様相を示しているように感じられる。今、我々に求められているのは、英語に特定化しない『外国語が使える日本人』の育成のための戦略構想」への発想転換ではないだろうか。

そのための話題の一つとして、日本における中国語教育を概観したい。日本の中国語教育と言え、江戸時代の唐通事養成や、更には遣隋使・遣唐使という留学生派遣政策にまで歴史を遡れるが、まずは 21 世紀の現在、その伝統をいかに受け継ぎ、どのように変化しようとしているかを概観する。

中でも、特に注目したいのは次の 2 点である：一、日本の大学における中国語教育の現状と諸問題；二、孔子学院に代表される中国からの戦略的ソフトパワーが、日本の中国語教育に与える影響。

## 【問題提起 概要】

### 1. ヨーロッパからのまなざし

#### ヨーロッパ人はなぜ言語を学ぶか—

#### 機能としての言語とアイデンティティとしての言語

西山教行（京都大学）

ヨーロッパの言語教育は変化と発展の途上にある。2001 年に公開された『ヨーロッパ言語共通参照枠』は、ヨーロッパの言語教育を多言語主義から複言語・複文化主義をめざす言語教育政策へと発展を遂げるうえでの転換点となっている。そしてこの言語教育思想はグローバル社会の現実に対応したものであると同時に、英語の単一言語支配に対抗する戦略の表れでもある。

言語学習の動機はともすれば、機能的次元に還元されがちであり、とりわけ英語や中国語といった経済的成功に結びつくと考えられている言語の場合、その傾向は顕著である。しかし流動化する世界にあつて、言語教育の目的を狭義のコミュニケーションに集約することは果たして現実的な選択だろうか。ヨーロッパ人は学習の動機を機能的次元に確認するものの、そこにとどまることなく、アイデンティティの根拠としての言語の価値を忘れていない。これはとりわけ移民の流入により多言語化、多文化化が加速する社会において、他者との共生を指向するためには不可欠の戦略であり、日本の言語教育にも裨益するところがあると考えられる。

### 2. アメリカからのまなざし

#### 多言語・多文化教育の課題と可能性—米国との比較から

西崎文子（成蹊大学）

1970 年代後半から 80 年代にかけて、米国では「多文化主義」教育のあり方が論争の的となってきた。多様な人種・民族によって構成される米国社会において、英語を中心とした教育を受けることが成功への道につながるのか、それとも、文化の多様性を重視し、自らの人種・民族的アイデンティティを育むことが優先されるべきなのか。このような問いは、言語政策のみならず、学校のカリキュラムや歴史教育のあり方などをめぐる議論を巻き込んで、一時「文化戦争」と呼ばれるほどの激しい論争へと発展していった。

英語を正式言語としながらも多民族国家を標榜する米国と、日本語と「外国語」とを峻別する日本との間の比較は簡単ではない。しかし、なぜ、どのように外国語を学ぶのかという問いを発するとき、米国の経験を参照することも無意味ではないであろう。そのよ

うな観点から、討論では、中国語教育をめぐる専門家の方々の様々な問題提起を受けて、二言語教育や多文化教育などが提起する課題や可能性を探っていきたい。さらに、欧米と日本や中国との間に、社会と言語をめぐるどのような価値観の相違があるかについても考察してみたい。